全国邪馬台国協議会 第３回会員研究発表会　（2016 年 9 月 19 日）

古事記と魏志倭人伝がリンクした

伊邪那美・岐は倭国統一の象徴

白崎　勝

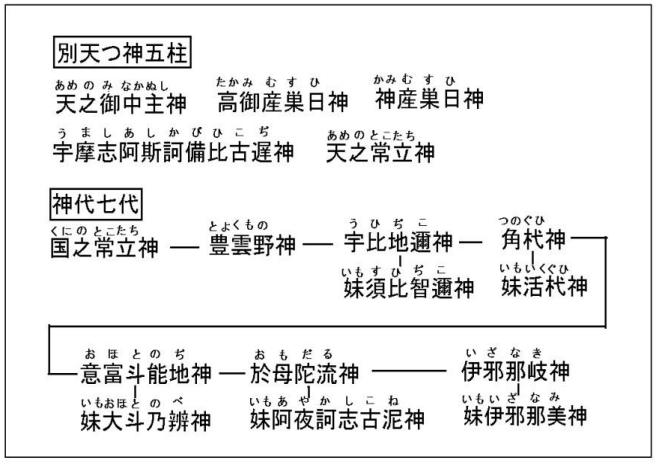
１、はじめに

伊邪那岐（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）は、神々の命を受け、「国生み」に向かった。これは古事記が記す、日本の歴史の始まりである。この伊邪那岐、伊邪那美の名が、魏志倭人伝に登場するクニの国名から、一文字ずつ採った名であることを発見した。

２、伊邪那岐と伊邪那美の名前と倭国のクニグニ

１）天地（あまつち）初めて開けし時の神々

表１



２）伊邪那美・岐は、倭のクニ名から１文字ずつ採った名。クニの代表は「天つ神五柱」の順。

表２

名前	クニ名	クニの代表
伊	伊都国	天之御中主神
邪	邪馬台国	高御産巣日神
那	奴（那）国	神産巣日神
美	不弥（宇美）国	宇摩志阿斯訶備比古遲神
岐	壱岐国	天之常立神

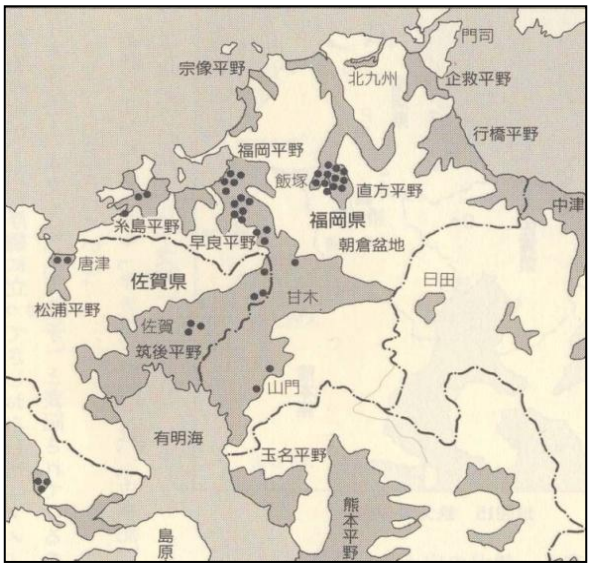
３、伊邪那美岐の文字順は、クニの格順になっている。

伊邪那美岐の文字並びは、採用したクニの格順になっている。「別天つ五柱」の代表５人は、魏志倭人伝が記す、当時の倭国乱を収束させる話し合いを行った。この二つ仮定を吟味する。

各順１　伊―伊都国　天之御中主

天照大御神を生んだ、伊邪那岐・伊邪那美の「神代七代」の系譜は、格順１の伊都国の王の系譜である。天照の名から天（海人）族と呼ばれる人たちのクニと思われる。クニの代表とした天之御中主は、その名の通り天であるから納得できる。

各順２　邪―邪馬台国　高御産巣日神



図は「奴国の滅亡（安本美典 1990）」より借りている。魏使倭人伝が記す倭国乱当時の墓制・甕棺から出土した鉄製武器の分布図で、この図から、倭国乱は博多湾沿岸、筑紫平野、直方平野領域の戦いと思われる。

これを収束するには、博多湾沿岸国に含めて、筑紫平野、直方平野の代表無くしては不可能である。

表にある五クニの内、四クニは博多湾沿岸国なので、残る邪馬台国が筑紫平野と直方平野を、代表していると考える。げんに筑紫平野の北、朝倉市や嘉麻市・田川市に格順２とした高御産巣日神が各所で祀られている。

高御産巣日神は、この広大な地域の代表であるが、伊都国の伊邪那岐の子、卑弥呼（天照大神）が都を置いたと記すように、伊都国を超えることはできない。格順２は順当である。

格順３　那―奴(那)国　神産巣日神

倭国乱では主に伊都国と奴(那)国が、戦った国であると思われる。奴(那)国を４．５の順位にしては、戦乱を収束できない。残り三柱のうち、天之常立神は天であるから奴(那)国ではない。宇美国の名には「うまし」の意味があるとして、宇摩志・・神を充てた。よって消去法で神産巣日神が奴(那)国の代表となり、同神が古事記記載の三番目なので格順３も適合する。

格順４　美―不弥(宇美)国　宇摩志阿斯訶備比古遅神

美は女性の名にあっている。魏使倭人伝の記載では、弥(宇美)国は千余戸で、壱岐国三千戸より小さいが、奴国に近く、同国と共に伊都国・邪馬台国と戦った国と考える。伊邪那美は神産巣日神の娘と思われ、彼女に敬意を表し順４としたと考える。

格順５　岐―壱岐国　天之常立神

天之常立神の名が示すように壱岐国は伊都国と同じ天で、すでに、天が順１にあり、また伊邪那岐に壱岐の岐の１文字が入り、格順５に不服はなかったと考える。

４、対応表の意味するところ

表２の意味するところの私見を述べる。

●名づけの動機　魏志倭人伝は記す。「その国は、もとまた男子をもって王としていた。七・八十年、倭国は乱れ相攻伐して年を経る。すなわち一女子を供立して王と為す。名づけて卑弥呼という。」

一女子を供立している。長く続いた戦乱を収束させるため、高御産巣日神と神産巣日神が関係国で話し合うことを提案したと考えた。まず伊都国王家の男子と、奴(那)国王家の女子が結婚し、その子から倭国王を共立する。またその男子と邪馬台国の王家の女子が結婚することで血縁関係を深める案である。

伊邪那岐と伊邪那美の子、天照大神が供立された女王で、魏志倭人伝がいう卑弥呼に該当する。これであれば、一女子が供立された理由が分かる。高御産巣日神と神産巣日神がともに産巣日(むすひ)とあるのは、日神・天照大神を生んだ功績によるものだろう。このような表現は後に、二代目天照大神とされる、豊受大神を生んだ和久産巣日神にも産巣日を適用している。
これが新しい国・倭国の歴史の始まりと考えた神々が、二人にクニグニの国名から、一文字を採り、統一の象徴として伊邪那岐・伊邪那美に与えたと考える。

●メンバー　クニの代表は国王と思われるが、伊都国は神代七代の系譜から推測して、於母陀流神(おもだるのかみ)が当時の国王である。しかし、戦いの当事者が話し合いに加われば、まとまらないと考え、天之御中主神が代表を務めたのだろう。

メンバーをみると、魏志倭人伝が記すクニ、対馬国と末盧国が無い。この二国は影響力が小さいか、壱岐国と伊都国の兄弟国に挟まれ、ほとんど支配下にあったクニと考える。魏志倭人伝に、末盧国の官の記載が無いことからも納得できる。

投馬国は後に邇邇藝(ににぎ)が天孫降臨して建国した国で、この倭国統一のときには無かったと考える。女王国の南にあり対立していた狗奴国は、話し合いの時点では影響力が無かったか、比定地の熊本平野は地勢的に仲間と認められる関係では無かったと考える。

●話し合いの場所　話し合いが行われた場所は、志賀島の志賀海神社と考える。伊邪那岐と伊邪那美は「天の浮橋」に立ったと記していて、「海の中道」は天の浮橋と呼ぶにふさわしい。海の中道の先には志賀島の志賀海神社がある。境内には「海の中道」を望む遥拝所があり、伊邪那岐と伊邪那美を想定したのか、二つの大きな亀石が置かれている。志賀海神社には、伊邪那岐が国生みから還ってきて、禊した際に成った、綿津見三神が祀られていて関係が深い。

●話し合いが行われた年代　梁書に「霊帝光和中、倭国乱」の記述があることから、光和の終わる、１８４年頃に話し合いが行われたと考える。その後、国生みの中で、天照大御神が生まれ成長し供立されたのは、200 年の直前と考えました。

時代	中国	皇帝		年代	出来事		
弥生後期	前漢			BC 100 AD	この頃、100余国のクニあり。(『漢書』地理志)		
	後漢			57	倭の奴国王、後漢に遣使。金印を賜る。(『後漢書』東夷伝)		
		安帝	永初1	107	倭国師升ら、後漢に奴隷160人を献上。(同上)		
		桓帝		146		桓霊間倭国大乱	住、七八十年倭国乱
				167			
		霊帝		168			
			光和	177-184	霊帝光和中、倭国乱(『梁書』)		
				189			
	魏	景初3		239	卑弥呼が魏に朝貢。金印や銅鏡を賜る。(『魏志』倭人伝)		
		正始4		243	再び遣使		
		正始8		247	魏史来倭		
		正始9		248	この頃、卑弥呼没		
	晋	晋始2		266	台余、最後の遣使		

77年

184年頃、話合い

●なぜ「国生み」を始めたのか　当時、北部九州では灌漑稲作が普及した結果、人口が増え土地争となったのが倭国乱と考える。主戦場となった室見川・那珂川間の人達は乱を逃れ、安曇の人達の助けを借り、船で瀬戸内海を東進し、新しい土地の開拓を進めていたと考える。

この状況を二人の産巣日神は、戦乱収束の機会ととらえ、倭国統一を建議したものと考える。選ばれた男女、伊邪那岐と伊邪那美を、いかに結びつけ、また王として育てるかまで腐心したのが、二人を国生みという名の、開拓に送り出すことだったと考える。

４、対応表から邪馬台国に関し導き出されること

①邪馬台国の代表を務めた、高御産巣日神が邪馬台国の王で、邪馬台国に都を置いた、卑弥呼は統一倭国の初代の王だったことが分かる。

②天照大神は、高木神こと高御産巣日神とともに、邪馬台国の高天原で活動していたことになるので、魏使倭人伝が記す卑弥呼であったことが分かる。

③筑紫平野を代表するクニが、話し合いに不参加はあり得ない。邪馬台国の高御産巣日神が筑紫平野を代表していることが分かる。このことから、邪馬台国は筑紫平野・直方平野内に限定される。

豊前国や南九州の説は否定される。格順２位の邪馬台国のみが、中国・四国や近畿地方など、遠地からやってきて、邪馬台国の代表を務めることは不可能である。いずれの邪馬台国説も否定される。

④倭国乱は北部九州の範囲に絞られた。このことは瀬戸内海に多くみられる、高地性集落の存在理由を、邪馬台国近畿説に基づく、卑弥呼共立以前の倭国乱に求めていた考古学的説明を改めなくてはいけない。

⑤古事記、日本書記が記す国生みに始まる歴史は、西歴 200 年の少し前に始まることが分かる。このことから、神武の即位を日本書記の天皇在位年数から遡った、紀元前とする考えは否定される。

⑥また建国の過程論で、二世紀末すでに近畿に邪馬台国があったとする論はすべて否定される。

５、金印を埋めた二人

江戸時代に、志賀島の海辺の畑の縁で、「漢委奴国王」の金印が発見された。この金印を埋めたのは、伊邪那岐と伊邪那美の二人だったという私見を述べる。

金印を二人が見つかった場所が、志賀海神社から、わずか 1.8km しか離れていないことから、この距離に必然性が見えてきた。

これまでは奴国滅亡時に奴国王か、その部下が、ひそかに小舟でやってきて隠匿した説が主である。しかし、その後の魏使来倭時の記述の中に、奴国の名が見えるので、滅亡では無かった。奴国の中心は春日市の須玖岡本、あるいは那珂川町付近とされていて、動乱のなか金印隠匿の場所として 20km も離れた志

賀島が選ばれたのなら、それは偶然でしかない。もっと近くても隠匿場所は見つかったと考える。

島に小舟でやってきたのであれば、いまの志賀島漁港や海水浴場付近の砂浜につけ、そこから山中に入ることになる。当時と地形は変化しているが、隠匿場所まで浜から 1.4km、20 分ほどの距離は遠くからやってきて、隠すに充分な距離とは言えない。

しかも林道から下の海辺、というのも不自然に思える。隠すならもっと時間をかけ、土石流で隠匿場所が分からなくなるところでなく、林道より上に登り、大きな岩陰などが自然である。

神々の話し合いは志賀海神社で行われ、話しがまとまり最後に、奴国王の神産巣日神は不要となった金印を、山中に埋めることを提案したと考える。この話し合いを不退転のものにする証しに、金印の隠匿を若い二人にさせることを提案したと考える。

二人は神々に見送られて山中に入るが、多くが見ている中では後をつける人もいない。しかし、会ったばかりの二人はぎこちなく、30 分、2km も進めば十分である。若い娘とともに、林道横の急斜面をよじ登るなど考えられない。道の下にやや緩やかな斜面を見つけ降りることにしたのも自然である。

持ってきた道具で小さな穴を掘り、集めた石で周りを囲み、中に金印の入った箱を置いた。さらに二人して転がしてきた大石で覆い、土や落ち葉をかぶせたのであろう。二人だけの秘密の作業は、二人をより親密にしたに違いない。

神々が、二人の仲を取り計らったと考える。以上のように奴国は滅亡でなく倭国連合だったことや、志賀海神社の遥拝所、発見場所までの距離や海辺であることが、若い二人の行いとしては必然な場所といえる。

後漢とは決別だったのか、途絶えていたのか、神々には、この後、改めて金印を探す必要もなかった。

以上